

## 「ウチの街って素敵でしょ？」

### はじめに

山口智子の企画する「山笑う」ブランド。簡単にコンセプトを説明すると「ヴィトンやシャネルもいいけど、日本の地方にも自然、風土、気候を活かせる高度な技術を持った職人がいて、その人たちが作ったブランドはどう？」というものである。その番組の中で職人がしきりに自分の技・チームワーク・街を自慢しているのが印象的だった。一方、私の友達は住んでいる街に対して「何もない」「つまらないところ」であると決まり文句のように話す。住んでいる人が「ウチの街って素敵でしょ」と自慢する街に私は住みたい。そう考えているところに、門司港のくらしを考える機会があった。

### 門司港の歴史 日本有数の貿易港から文化自然融合都市型リゾートへ

門司港は、大きくは関門海峡という九州と本州に囲まれ、門司港の街自体も三方を山に囲まれた天然の良港であり、古くは塩田の広がる農漁村であった。しかし、門司港は明治 22 年に国の特別輸出港として指定されたことをきっかけに、塩田は埋め立てられ、国際貿易港、製鉄・製鋼の街として日本有数の貿易港にまで発展した。この時代まで門司港は常に海辺が住民活動の中心となっていた。しかし、戦災や太刀浦・田ノ浦埠頭整備によって港湾機能が薄れ、さらに、昭和 33 年の関門鉄道トンネルの現門司駅接続や昭和 38 年の 5 市合併によって、交通や経済の拠点としての機能も薄れ、経済発展から「取り残された街」となった。近年はこの取り残された近代建築を活かし、「門司港レトロ事業」という歴史・自然・文化の融合した都市型リゾートとして地域再生を図っている。観光客は増加していたが、ここ 2 - 3 年は減少傾向にある。

### 現地調査を通じて 海から離れたくらし…かすかに残る港のくらしの風景と技術

#### 1) 門司港の職人 - 鉄鋼・船大工 - ( 図 現状のまとめ内写真 )

鉄鋼。今までの門司港、北九州を支えてきた高度な技術。その末端を担う町工場がまだ残っている。鉄鋼はこの街の歴史が生み出した技術といっても良い。しかし、話を聞くと昔は多かった町工場だが、若い人とこの仕事の接点がなく、イメージが悪いことから後継者不足でその数は減少傾向である。また、末端の技術を支えるもの同士の連携がないことも口にしていた。船大工についても同様に、現在多くの船は田ノ浦で修理を行い、職人の数は減少している。

#### 2) 海のくらしの見える風景

レトロ地区の隣の第二船だまりには漁業船が係留されている。本州と九州を結ぶ関門海峡大橋を背に  
門司港の位置  
レトロ地区の様子

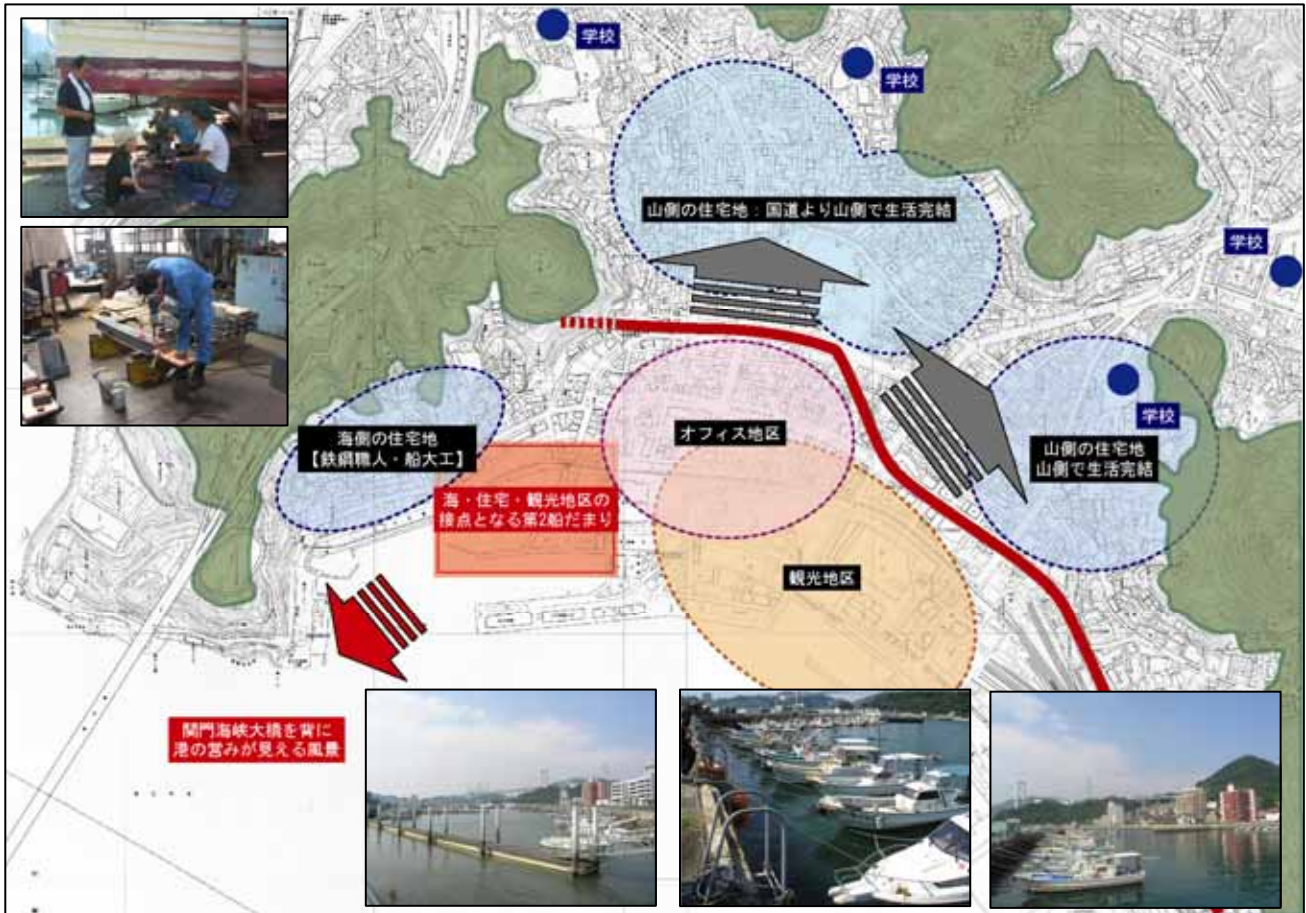


して、漁師が船の上で片付け船掃除などの作業をしている風景や船大工が作業をしている風景(下図内写真)は、門司港にしかないらしい風景であり、門司港の魅力であると考えた。

### 3) 住民の生活が海から離れていく傾向

国道3号は幅員が広く、交通量も多いため、人間の活動の大きな障害となる。また、国道より山側に商業地が充実しているため、住民の生活が国道より山側で完結している。わざわざ国道を渡って海辺に出てくる機会が少ない。また、学区統合によって海の近くにあった学校はなくなり、子供の活動範囲も海から離れていく傾向にある。さらに、多くの住民は「レトロ地区=観光」のイメージがあり、海沿いにあるレトロ地区にも行かない。

現状のまとめ



### 提案 住民のくらし・活動を再び海へ

現地調査を踏まえて、私たちは門司港にしかない風景を利用し、第二船だまり(上図の赤い四角)を門司港に住む人が活動し交流する庭(空間)を創ることを提案する。その際、抑えるポイントは2つ。

#### 1) 住民の活動を昔のように海に近づけること(住民生活の一部に海があること)

ジム仲間、井戸端会議、合コン、忘年会・・・何かしながら、又は何か目的を設定して人と交流を図るのが好きな日本人。ただ広場を作っただけでは地域住民が活動し、交流する庭にはならない。さらに、現状の生活は国道より山側で十分なのだから、生活の一部として船だまりに来なければできない空間、機能を創り出す必要がある。そこで、空間にはそこでしかできない特定の目的を持った機能を入れる。

#### 2) 門司港の高度な技術を残していく

このままでは消えていく可能性の高い門司港を支えてきた技術。これを何とか残すことのできる、または残すための手助けとなるような機能を入れる。

具体的には・・・

### 1) 職人さんのための舞台 (門司の技術体験センター)

門司港から消えつつある技術 (船大工や鉄鋼業の町工場など) を紹介・教育する場を設置する。門司港の学校と連携し、環境学習の一環としてここで授業を行うことにより、若い世代が技術に接するようになるだけでなく、子供の行動範囲が海に近づく機会を生み出す。また、高度な技術を学びたい人、技術者同士の連携もこの施設を創ることで活発化する。つまり、**門司港の職人・技術を見せる舞台**を設置。

### 2) 門司港のくらしの舞台

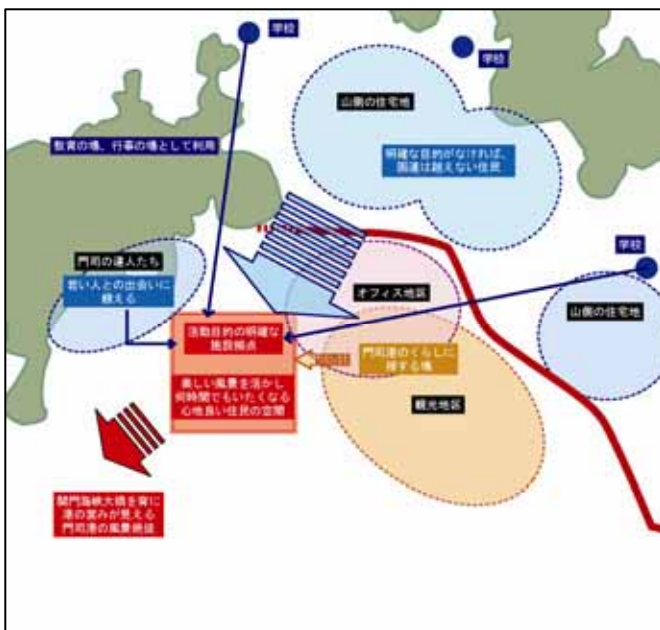
第二船だまりはコの字型をした囲まれた空間である。程よい大きさで、真ん中が水面であるため、対岸の人の様子がよく見える。そこで、釣りをしやすいようにデザインした小休憩スペースや、漁師が作業しやすいような小休憩スペースなど、活動目的をある程度付加した休憩スペースを船だまりに複数設置する。当然、そこからは門司の山と海、そして各々の休憩スペースで活動する人々の様子が 1 つの風景となる。つまり、**門司港のくらしを見せる小舞台**を設置。

### 3) 門司港住民のための舞台

関門海峡大橋を背景にして手前に船が並ぶ**門司で最も美しい風景のある船だまり**の奥の部分に拠点となる大きな休憩広場を設置する。普段は美しい風景を見ながら休憩する場であるが、学校行事や地域行事、ライブなどのイベントの際にはこの休憩広場を中心として船だまりが大きな劇場となる。つまり、大きな休憩広場が舞台となり、2) の小休憩スペースが観客席となる。場合によっては漁業組合と協力し、船を浮かべて、船が観客席となっても面白い。船だまり全体を住民のための大きな舞台として利用。

このように3つの舞台を作り、「イベントがあればこの船だまりに行く」、「勉強しに船だまりに行く」というように、住民の活動が海に近づくきっかけや住民が交流するきっかけを創出する。そして、ここに来て見られる漁師や釣りをする人の風景は、住民が門司港のくらしと海のつながりを再認識できる日常風景となる。この空間をきっかけにして住民の生活が再び海に向き、「ウチの街って素敵でしょ」と口にする人がたくさん出てきてほしいと思う。さらに、観光者にとってこの船だまりが門司港の生活を見る舞台となり、ここをきっかけに「観光したい街」から「住んでみたい街」に門司港が変わって欲しい。

計画イメージ図 [周辺との関係]



計画イメージ図 [第二船だまり内]

